

# 大学生の人格形成と養育期における両親との関係

武田京子<sup>\*1</sup>, 大科麻美

岩手大学教育学部

Relationship between Student's Character-builder and the Parents' Influences

<sup>\*1</sup>Kyoko TAKEDA and Asami OOSHINA

*Iwate University, Faculty of Education*

## 1. はじめに

戦後の日本家族の顕著な特色として、核家族化及び夫婦家族意識の浸透を挙げることができる。サラリーマンが誕生し、都市への人口が流出し始めた明治期から核家族世帯は存在していたが、意識の面では、家族は家長を中心とした三世代以上からなる大家族を家族のあるべき姿と考えていた。1950年代後半から経済の高度成長に伴う人口移動などによって世帯の分割が活発になると同時に、男女平等の定着、女性の高学歴化、有職女性の増加に伴い、夫婦を基本とする家族意識が定着した。

夫婦を基本とする家族では、家事労働や子どもの養育を夫婦が共同で行う意識が生まれてくる。しかし、家族を取り巻く社会では、伝統的な性別役割分業や幼児期までは、母親の手元において育てるのが望ましいという「母性神話」が根強くあり、特に幼少期の子どもの養育は、母親の役割と位置づけられがちである。地域に知り合いも無く、一人で子育ての負担を感じず母親たちに、育児ノイローゼ、乳幼児虐待などの問題が生じ、育児不安を抱えるようになったのは1970年代からである。一方、子育て

の一端を担う父親たちは、手をこまねいていたのではなく、積極的に子どもとかかわろうとし、実際に幼稚園や学校の行事に積極的に参加する姿も見られる。しかし、自分自身が育てられる過程で、父親と一緒にすごした経験の少ない父親にとって、子どもと一緒に居るときにどのような行動をとったらよいのかがわからず、自分自身の被養育体験に照らし合わせて、母親をモデルとした行動をとる場合が多い。このことを指摘したのは、正高信男である<sup>1)</sup>。

正高は、1998年愛知県の中学2年生生徒を対象とし、人格を社交性・不安度・攻撃性の3次元から担任教師によって評価させた。さらに、生徒の保護者の協力によって生徒の家庭背景にかかわる情報を得て、社会性との関連の分析を試みた<sup>2)</sup>。社交性(Social competence)は、「世渡り上手」という意味ではなく他人と協調して関係をつけていく能力、不安度は社会的引込み思案(withdrawal)の程度を示す没社会性を示す指標、攻撃性は、怒りやすさ、暴力的な情動の表出のしやすさの指標と位置付けている。分析の結果、不安度・攻撃性の得点の高い生徒の家庭背景には、父親とのコミュニケーションの程度による要因が存在していることがわかった。父親自身が子どもとコミュニケーションをどのくらい持っているか、という判断ではなく、母親から見た

(審査終了 2008年4月26日)

\*1 〒020-8550 盛岡市上田3-18-33 (勤務先)

父親と子どもとの関係の程度の多寡によって起因するものだ, という結論であった。

## 2. 目的

本研究では, 子どもの人格形成に養育期の両親のかかわり方がどのように関与しているかを明らかにすることを目的に, 四年制大学生を対象に質問紙調査を実施し, 分析を行った。特に, 現代家族で育児への関与を期待されている父親に重点を置き, 母親と比較しながら, 大学生が, 自分自身の子ども時代に親とどのような関係であったか, 性格形成に及ぼす影響について考察を行った。

## 3. 方法

### ① 調査方法

無記名自記式質問紙法

### ② 調査対象及び調査時期

岩手大学に在学する男女学生 300 名に調査用紙を配布し, 男子 150 名, 女子 140 名の有効回答を得た (回答率 96.7%)。調査時期は 2006 年 10 月から 11 月である。

### ③ 調査項目

- i. 自分の人格に対する評価 (社交性・不安度・攻撃性各 10 項目 5 件法)<sup>3)</sup>
- ii. 養育期の両親との関係 (幼・児童期及び思春期各 10 項目)

## 4. 結果

### (1) 自分の人格をどのようにとらえているか

社交性は, 人間関係を形成する能力ととらえ, 以下の 10 項目の質問を行った。

- ① いろいろな友達と付き合いがある
- ② 新しい環境にすぐなじめる
- ③ 意見が対立したとき解決策を見出せる
- ④ 自分から意見を提案する
- ⑤ 後輩の面倒を見る
- ⑥ 初対面の人と打ち解ける
- ⑦ リーダーシップを発揮する
- ⑧ 自分でやり遂げることに喜びを見出す

⑨ 先輩や年長者とうまく付き合える

⑩ 友だちが困っているときに助ける

初対面の人や場所, 立場の異なる人にも柔軟に対応できるか, 歩み寄りの努力や提案をすることができ, さらに客観的に双方の意見を把握できるか, 意見をまとめ指導する能力について, 判断させた。

不安度についても同様に 10 項目の質問を行った。

① いつも元気が無く, 何をしても楽しくない

② 物事を悪い方向に考えがちである

③ 困ったときに相談できる人があまりいない

④ 表情が乏しい

⑤ 落ち込んだり不安を感じたりして, 精神的に疲れやすい

⑥ 同級生の中で目立たない

⑦ 人見知りをする

⑧ 臆病, 怖がりで新しい環境を避ける

⑨ 仲間の内で, 内気または不安感がある

⑩ 引っ込み思案で, 他の学生たちが話している中  
には入れない

日常的な場面での明るさ, 積極的に自分を表現することをスムーズにできるか, を判断させた。

攻撃性は, 感情の表出を状況に応じてコントロールできるか, 自分の言動を客観的に受容できるかを問う以下の 10 項目である。

① 他の学生とけんかをする

② 自分の意見が通るまで主張し続ける

③ ちょっとしたことでもイラつく

④ 他の学生の悪口を言う

⑤ 親に叱られたり注意されると反抗する

⑥ 先生に腹を立てたときに口答えをする

⑦ いやなことがあったときに何かに八つ当たりする

⑧ 怒りっぽい, すぐにキレル

⑨ 友達が嫌がっていることを無理強いする

⑩ 自分がしようとするのをさえぎられると不愉快になる

以上の質問に「よく当てはまる」「当てはまる」「どちらともいえない」「当てはまらない」「まったく当てはまらない」の選択肢から選択させた。

図 1-3 は人格の三要素について, 「よく当てはまる」

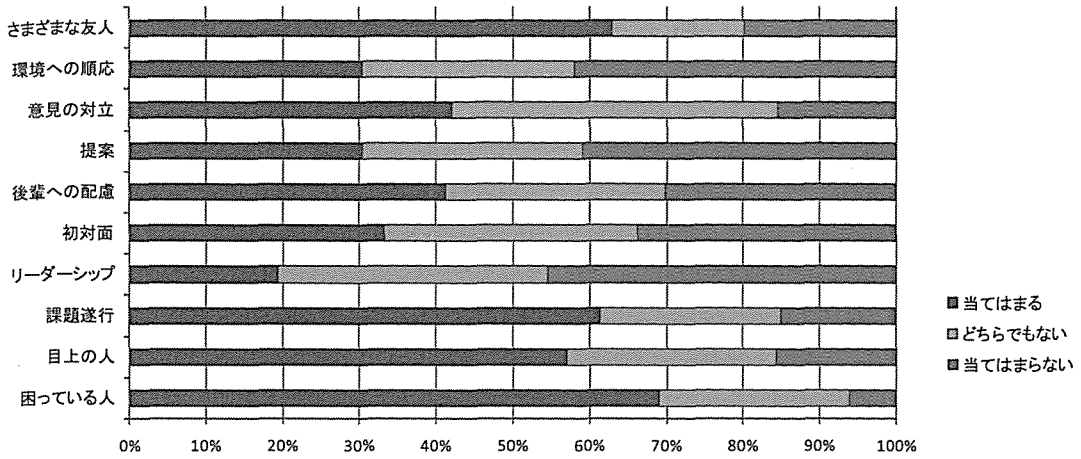


図1 大学生全体の人格評価(社交性)(n=290)

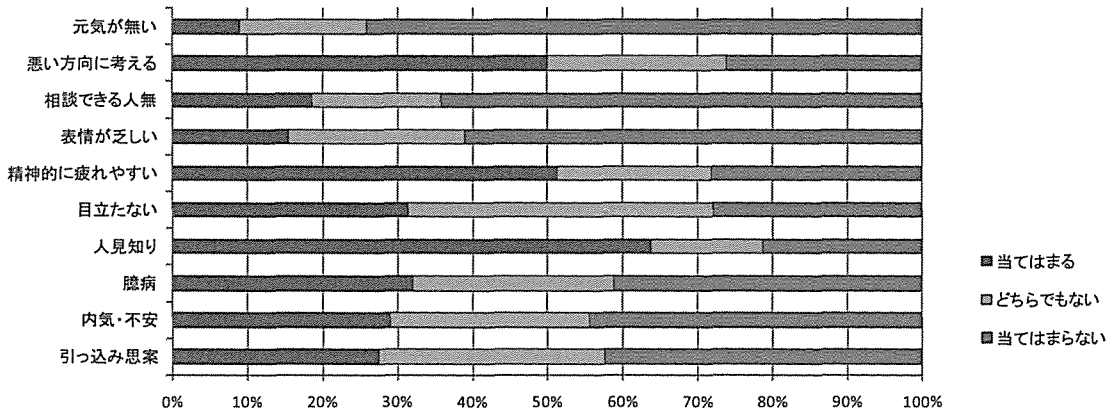


図2 大学生全体の人格評価(不安度)(n=290)

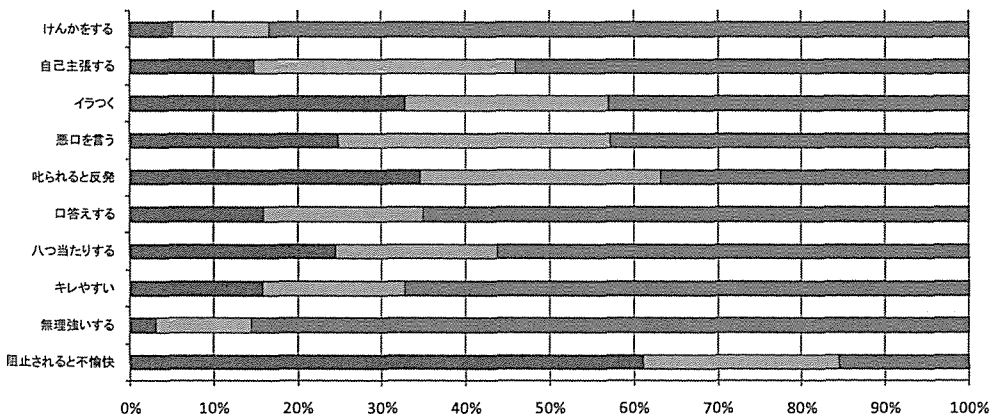


図3 大学生全体の人格評価(攻撃性)(n=290)

と「当てはまる」を「当てはまる」, 「当てはまらない」「まったく当てはまらない」を「当てはまらない」として集計したものである。

社交性の面では, 日常的な少数の人との付き合いはうまくできる(友達がたくさんいる。困っている人や後輩に援助し, 目上の人ともうまく対応できる。)が, 対立している意見を調整することや, 自分からリーダーシップをとって多数の人と積極的にかかわることは苦手としている様子が見られる。

不安度では, 元気があり, 表情も豊か, 困ったときの相談相手はいるのだが, 人見知りがちで, 物事を悪い方向に考え精神的に疲れてしまう様子が見られる。

攻撃性では, 自分がしようと思っていることを阻止されると不愉快に感じ, 叱られたりすると, 反発を感じたりするが, それによってけんかをしたり, 切れたり, 八つ当たりをすることは少ない。また, 三要素の各項目で男女差があるものは見られなかった。

次に, 三要素 10 項目の「よく当てはまる」から「まったく当てはまらない」までに, 5 から 1 の点数を当てはめ, 社交性・不安度・攻撃性の得点を集計し, 平均を求めた(図 4)。社交性では女子 > 男子, 不安度では女子 < 男子, 攻撃性では女子 > 男子の傾向が見られたが, 統計的有意差はなかった。

## (2) 養育期の両親との関係

養育期に両親とどのような関係にあったか, 幼・

児童期及び思春期共通項目として, 「親子で外出」「一緒に食事」「悪いことを叱る」「学校での話を聞く」, 幼・児童期のみの項目として, 「手伝いをする」「一緒にお風呂に入る」「遊ぶ」「身の回りの世話をしてもらう」「疑問にこたえる」「ほめる」, 思春期のみの項目として「用事を頼まれる」「役に立つ話をしてもらう」「将来の相談をする」「つらいときに慰めてもらう」「悩みの相談にのってもらう」「親の愚痴を聞く」について 5 件法で回答し, 人格評価と同様に「よく当てはまる」と「当てはまる」を「当てはまる」, 「当てはまらない」「まったく当てはまらない」を「当てはまらない」として集計したものである(図 5~図 8)。さらに「よく当てはまる」から「まったく当てはまらない」までに, 5 から 1 の点数を当てはめ両親との関係得点とした(表 1)。

表 1 各時期の両親との関係得点

	幼・児童期 父親	思春期 父親	幼・児童期 母親	思春期 母親
男子	32.7	28.9	37.5	31.9
女子	34.1	29.7	40.9	37.2
全体	33.3	29.3	39.1	34.4

幼・児童期は, 父親よりも母親との接触頻度が高い。女子学生の幼・児童期の母親との関係得点が高く, 男子学生の思春期の父親との関係得点が低くなった。幼・児童期及び思春期の同一質問の 4 項目に着目すると, 「当てはまる」の割合が低下したことから, 思春期になると, 幼・児童期よりも両親との関係頻度は低くなったことがわかる。

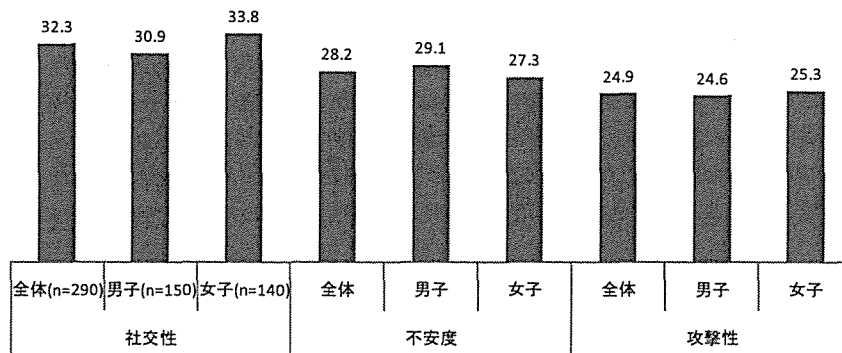


図 4 人格構成各得点の平均値

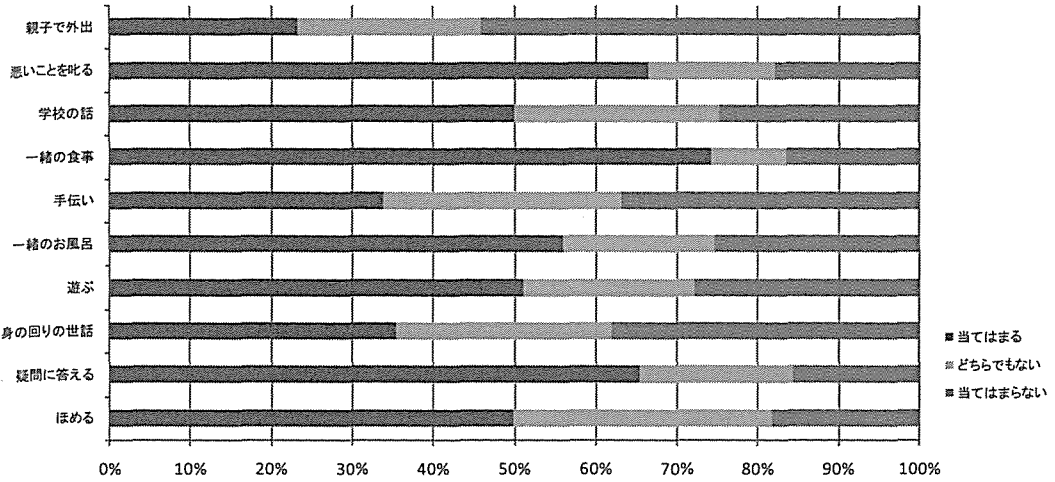


図5 大学生全体の父親との関係: 幼・児童期(n=290)

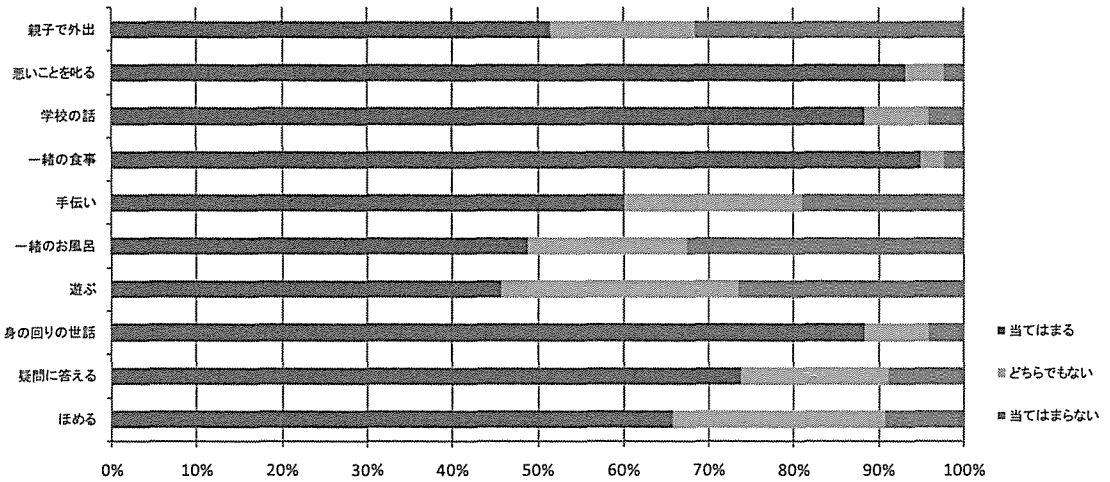


図6 大学生全体の母親との関係: 幼・児童期(n=290)

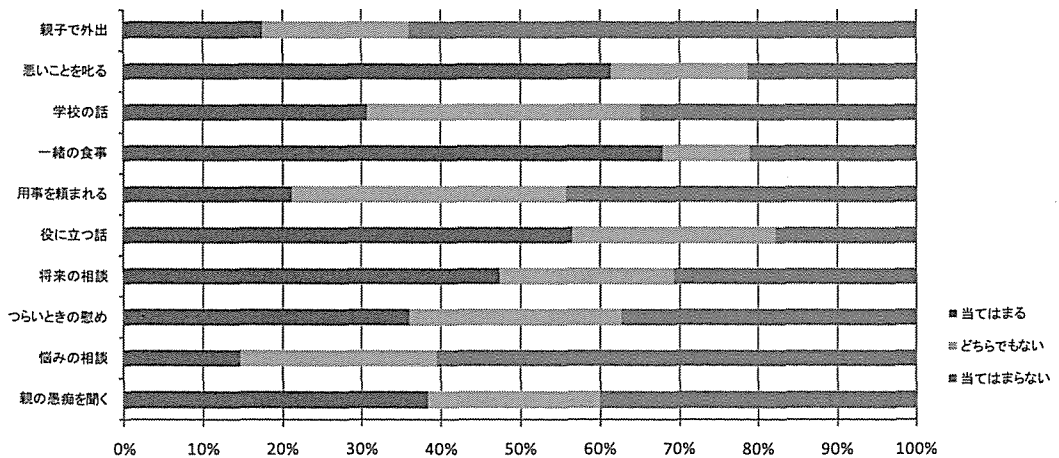


図7 大学生全体の父親との関係: 思春期(n=290)

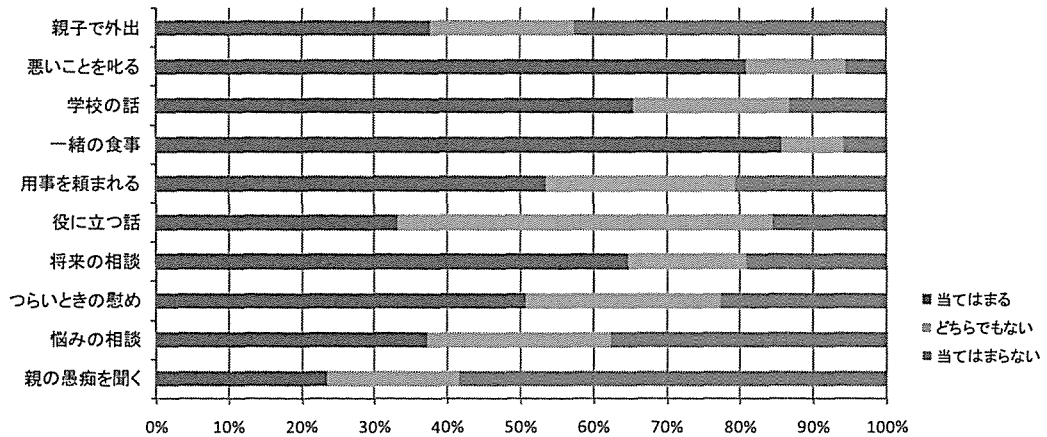


図8 大学生全体の母親との関係: 思春期(N=290)

しかし、思春期の「役に立つ話をしてくれる」の項目は、父親について「よく当てはまる」の回答が、母親よりも高い結果となった。正高氏が父親として取るべき役割としてあげている、「子どもが何かに失敗してがっかりしているときに励まし、勇気づけ、『さあ、行きなさい』と子どもを押しやる」<sup>4)</sup>、社会へ巣立っていくための方向付けという父親の果たすべき役割を果たしている様子がわかる。

### (3) 人格形成と親との関わりとの関連性

人格形成三要素と親との関係の関連を考察するために、人格形成三要素 10 項目の平均点 ± 1/2 S D を指標に社交性 L 群 (35 以上) L 群 (29 以下)、不安度 H 群 (29 以上) L 群 (21 以下)、攻撃性 H 群 (39 以上) L 群 (29 以下) と分類した。同様に親との関係については、幼・児童期と思春期を合計し、父親との関係 H 群 (68 以上) L 群 (56 以下)、母親との関係 H 群 (77 以上) L 群 (67 以下) とし

クロス集計を行った (表 2)。

幼・児童期と思春期の母親と父親のとの関係は、統計的な有意差は見られなかったが思春期になると男子学生では、母親との関係 H 群は、社交性が高く、不安度及び攻撃性が低くなった (1%水準以下)。父親との関係 H 群は社交性が高い (2%水準) が、不安度はやや関連 (5%水準) があつた。男子学生では、父親との関係よりも母親との関係が人格構成に影響を与えている結果となった。女子学生の場合は、さらに母親との関係は男子学生よりも強く、母親関係 H 群で不安度が低くなった (0.1%水準)。父親との関係 H 群では、攻撃性が低い (5%水準) という結果が得られたが、社交性、不安度には関連は見られなかった。男子女子とも母親との関係が高いほど社交性が高く、不安感・攻撃性が少ない結果がえられた。

表 2 男子学生の人格構成の 3 要素と両親との関わり

	男子	男子	$\chi^2$	男子	男子	$\chi^2$	男子	男子	$\chi^2$
	社交性 H 群	社交性 L 群		有意確率	不安度 H 群		不安度 L 群	有意確率	
父親関係 H 群	43	37	5.73	27	40	3.8	34	36	0.48
父親関係 L 群	28	39	0.02	35	26	0.05	36	29	0.49
母親関係 H 群	43	25	7.12	24	39	7.83	28	41	6.78
母親関係 L 群	27	40	0.008	42	26	0.005	41	24	0.009

## 5. 考察

大学生の人格形成の構成は、社交性が高く、不安度、攻撃性は低い得点となった。攻撃性では女子が上回ったが、これは「自分のしようとしたことを阻止されると不愉快になる」という項目が突出していたため、行動が攻撃的であるという意味ではない。望ましい人格を「社交性が高く、不安度及び攻撃性が低い」ととらえると、大学生の人格構成は、親、特に母親との関係が密なほど望ましい人格を形成しているということが出来る。

正高氏が述べているような「父親との関係が低いと不安度・攻撃性が高まる」という傾向は見出すことが出来なかった。これは調査対象学生に攻撃性の強い、いわゆる切れやすい特質を持つ学生がいなかったためと考えられる。

一般的な傾向として、親との関係は思春期になると希薄になるといわれるが、子どもの自己形成が進み親と一線を引いた自分の世界を作り出すため、または、クラブ活動や友人と過ごす時間が増え親とともに過ごす時間が減少するためなどの理由が考えられる。女子学生は思春期になって減少するものの、母親との関係得点は幼・児童期の男子の母親との関係よりも高い。過去を振りかえったときに、当時の様子を正確に把握できるか疑問もあるが、男子学生は女子学生よりも親子関係を希薄にとらえている。男子学生が、早く精神的に自立しようとする傾向があるのか、親が早く自立させようと働きかけるのか、今回の調査ではわからないが、「男の子は早く自立させ、女の子は手元に置いておきたい。」という親の意識や「男だから親にいつまでも依存してはいけない。」という子どもの意識が存在する可能性もどうかがある。

親との関係は両親間で比較すると、母親との関係が高いほど不安度が低く社交性が高く、攻撃性が低

いということが出来る。母親との関係の高さが不安度の解消に役立っているとすれば、人間に対する基本的な信頼関係が母親との関係の中で形成されたということが考えられる。母親との関係が密であったということは、今回の対象となった大学生の幼少時の環境が専業主婦である母親、もしくは有職であっても性別役割分業によって、子育ては母親の手で行われていた様子が推測される。

大学を卒業し社会人になり、自分自身の子どもを育てるときに、父親とともにした行動がどのような影響を与えるのか、については、今後、の課題としたい。また、男女共同参画型社会において、有職女性が増加し、核家族化もさらに進行することを考えると、父親の育児関与は期待され、その結果、父親の働きかけが、子どもの人格形成にも大きく影響を与えていくことが考えられる。今回調査対象になった、主として母親との関係を強く持っていた大学生が、親になった場合、どのような親役割を取っていくのか、特に男子学生が、母親役割の代行者になるのか、父親としての役割を意識的に取れるようになるのか、長期的に追跡調査をする必要がある。学校教育で家庭建設について学習するとき、「結婚して子どもを産み育てる」というだけでなく、次世代を育てる力を学習する場を積極的に考えていく必要がある。

### <引用文献>

- 1) 正高信男, 二人目の母親になっている日本の男たち, 東京, 主婦の友社, 2004.
- 2) 正高信男, 父親力, 東京, 中央公論社, 2002.
- 3) 正高氏が中学生を対象に行った調査項目を幼・児童期及び思春期に適合させるために、内容・表現を一部変えている。
- 4) 前掲書 1) P4.